

Title	1831年のノッティンガム暴動(上)
Sub Title	Nottingham riot of 1831
Author	松村, 高夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1982
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.75, No.6 (1982. 12) ,p.854(46)- 872(64)
JaLC DOI	10.14991/001.19821201-0046
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19821201-0046">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19821201-0046</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 1831年のノッティンガム暴動（上）

松村高夫

- I 序
- II 暴動の発生・拡大・消滅の過程
- III 裁判と処刑（以上、（上））
- IV 暴動の主体と意図（以下、（下））
- V 暴動発生の条件としての政治的・経済的構造
- VI 暴動発生の契機としての祝祭
- VII 暴動拡大の条件としての治安行動
- VIII 結論に代えて——選挙法改革暴動の歴史的意義

## I 序

イギリス社会運動史研究の一分野として、最近、暴動、騒擾、蜂起の研究が興隆しつつあるが、われわれはすでに G. リューデ、E. P. トムスン、E. J. ホブズボーム、J. スティーヴンソンなどによる研究蓄積をもっている。これらの諸研究は、組織化ないし制度化されていない一見偶発的に生じたかにみえる暴動に、民衆の社会運動としての積極的歴史評価を与えるという点で、共通している。

ところで、暴動の研究は何を明らかにすべきだろうか。リューデは、群衆を「民衆」とみるミシュレの捉え方と群衆を「悪漢」とみるパークやテースの対称的捉え方が、前者を好むとはいえ、「両

- 注(1) George Rudé, *The Crowd in History: A Study of Popular Disturbances in France and England, 1730-1848*, 1964, rev. ed. 1981, 古賀秀男, 志垣嘉夫, 西嶋幸右訳『歴史における群衆』, 法律文化社, 1982年。  
E. P. Thompson, *The Making of the English Working Class*, 1963, Penguin ed. 1968.  
E. J. Hobsbawm, *Primitive Rebels: studies in archaic forms of social movement in the 19th and 20th centuries*, 1959; Do, 'The machine breakers' in *Labouring Men*, 1964.  
John Stevenson, *Popular Disturbances in England, 1700-1870*, 1979; J. Stevenson & R. Quinault eds., *Popular Protest and Public Order: six studies in British history, 1790-1920*, 1974.

暴動、民衆騒擾に関する文献は前掲 Stevenson, *Popular Disturbances* の巻末脚注および文献目録 pp. 324-62 が網羅している。また、暴動と犯罪史との関連では、Victor Bailey, 'Crime, Criminal Justice and Authority in England', in *Bulletin, Society for the Study of Labour History*, no. 40, Spring 1980, pp. 36-46 の文献解説と文献目録が有益である。

なお、暴動、暴徒、鎮圧などの用語の使用は、その歴史的意義を評価する問題関心からすれば本来カッコ付きで使用すべきものであるが、本稿ではすべてカッコを付さないで使用する。

方とも紋切り型であり、また両方とも群衆を肉体から離れた抽象的な存在として扱い、生きた人間の男女の集合としては扱っていない」と指摘する。そして、この紋切り型からいかに脱却すべきかと問題を提起し、まず、「事件そのものについてだけでなくその起源と事後についても、実際に何が起こったのか。即ち、われわれは群衆が加わった事件を、最初からその適切な歴史的文脈の中に位置づけるようにするべきである。というのは、これをしないで、われわれはどのようにして紋切り型を乗り越え、群衆の考え方、目的、および行動を徹底的に調べ上げることを望み得るのか」という。第二に、参加した群衆の規模と行動、首謀者を明らかにすることにより、群衆の構成分子、社会的出身、年齢、職業を確認するのに役立つとする。第三に、群衆活動の標的または被害者を確定することにより、事件の本質が判明し、参加者の社会的・政治的目的が明らかになる。第四に、その目的、動機および活動の下に横たわっている観念はいかなるものであったか。第五に、鎮圧のための治安当局側の勢力は、どの程度効果的であったのかを明らかにする必要がある。何故ならば、「ストライキ、暴動、または革命的状況における群衆活動の成否は、治安判事が果敢であるか気がすまないか、あるいは警官、警官隊、または軍隊がどの程度忠誠であるか離反しているかに、大いに依存するだろう」からである。最後に、事件の結果と歴史的意義を明らかにすることが必要である、と指摘する。<sup>(2)</sup>このようなリュードにより提起された暴動研究が明らかにすべき課題は、基本的に正しいと筆者は考える。ただし、リュードが、カネッティの『群衆と権力』について「今日では多くの追随者があるとはいえない」と述べたり、「さまざまな民族の象徴という観点から、『歴史における群衆』（これが彼の本の一章の副題である）を論じている。しかしこのことは、範囲を確定していく過程のほんの第一歩となり得るにすぎない<sup>(3)</sup>と批判的である点に、筆者は同意しない。リュードが対象とするのは、「『歴史における群衆』一般ではなく、限定された時期と限定された地域の範囲内の群衆である<sup>(4)</sup>」として、フランスとイギリスの歴史における1730年代から1840年代に至る時期を選び、主題を限定していることの意図は了解できるが、そのことが、集団心理学、精神医学、文化人類学といった分野の諸成果の批判的摂取を拒否することになってはならない。カネッティの前記著書には、「歴史的分析」を標榜しながら超歴史的群衆把握に陥る危険性なしとしないが、それでもなお、暴動研究に有益な視角も提示していると筆者は考える。それ故、本稿は、『群衆と権力』から随時引用することになろう。様々な分野の諸成果を拒否すべきではないというのは、つぎのような意味においてである。

暴動は極めて複雑な諸原因の相乗作用として発生・拡大していくが故に、それは社会経済史的分

注(2) G. リュード『前掲書』、訳、序章。なお、基本的には賛意を表しながらも、職種と階級に注意を集中してコミュニティを無視するリュードの群衆研究の方法は、群衆行動の抗議の側面のみ強調し、従順の側面を軽視しているとするR. J. ホルトンの批判がある。R. J. Holton, 'The crowd in history: some problems of theory and method', in *Social History*, vol. 3, No. 2, 1978, pp. 219-33.

(3) G. リュード『前掲書』、訳、2ページ、18ページ、注(3)。

(4) 『同上』、3ページ。

析だけで説明しうるものではない。同時代の社会的・経済的階級対立に暴動発生の基本的原因があるにせよ、もしそれだけに分析を限定するならば、何故その階級対立が暴動として発火し、急速に拡大したのか(また、逆に何故急速に消滅したのか)を充分明らかにすることはできない。暴動の全体の説明には社会的・経済的諸関係の解明の他に、政治的諸関係、さらに、警察、軍隊、裁判などの治安・弾圧機構がいかなるもので、いかに作動し、暴徒や一般市民はそれにどう対応したかという点を説明することが必要である。さらに、暴徒の極度の精神的高揚を集団心理学や精神医学から照射することも可能でありかつ必要である。さらに、祝祭と暴動との関係という文化人類学的ないし民俗学的解明も必要になってくるだろう。もとより、集団心理学、精神医学、文化人類学などの成果を全面的に適用することは、筆者の能力を越えているが、暴動という研究対象の複雑性が、分断化された学問上のディスイプリンではなく総合化されたそれを必要としていることだけは、確かであろう。それを社会史の方法といってもよい。本稿は、1831年10月に第一次選挙法改革をめぐるノッティンガムに発生した暴動を分析するが、以上のような意味での社会史の方法を適用する試みでもある。

ノッティンガム暴動に関しても、すでに研究蓄積がある。この主題に関する最初の体系的研究は、1959年に発表された J. M. ゴルビーの<sup>(5)</sup>論稿である。そこでは、暴動の経過が明らかにされ、暴動の原因として、ニューカッスル侯による経済的独占を通じての腐敗選挙区の実態が解明された。その10年後に刊行された M. I. トーミスの<sup>(6)</sup>著書はそのなかの一章を「選挙法改革」にあて、ノッティンガム市会や「政治同盟」の構造の分析を通じて、市の急進主義をも照射し、暴動の発生、拡大、さらに鎮圧後までを多面的に分析した。ただし、暴徒と選挙法改革論者との関連は「完全には明白でない」とし、暴動を選挙法改革運動の脈絡のなかでも否定的に評価している。予め明確にしておけば、トーミスは、ラディズムなどに発現したノッティンガム急進主義の歴史的脈絡のなかで選挙法暴動を把握するという方法をとらず、それぞれ別個の事象として切断して分析している。従って、1830年代初期にイングランドに「革命的危機」があったとする G. D. H. コールや E. P. トムソンの主張に批判的である。また、暴徒に対する市民の潜在的な支持という点も、トーミスの分析から欠落し、この点では筆者と見解を異にする。

1973年に地方学術誌に掲載されたノッティンガム暴動の小特集の<sup>(7)</sup>2論文は、いずれも実証密度が濃く、新しい展望を拓くものであった。そのなかで、R. A. プレストンは暴動勃発時の治安部隊

注(5) J. M. Golby, 'The Duke of Newcastle and the Nottingham Reform Riot', Robert Mellors Prize Essay, Nottingham University, 1959, typescript 21 p.

(6) M. I. Thomis, *Politics and Society in Nottingham 1785-1835*, 1969, especially chapter 11, pp. 217-36. 前掲 Stevenson, *Popular Disturbances* も、ノッティンガム暴動についてはトーミスの本書に依拠している。

(7) 'Nottingham and the Reform Bill Riots of 1831: New Perspectives', Introduction by M. I. Thomis, [I] by R. A. Preston, and [II] by John Wigley, in *Transactions of the Thoroton Society*, 77, 1973-4, pp. 82-3, pp. 84-94, and pp. 95-103 respectively.

の行動の分析で優れており、また、J. ウィグリーは暴徒の職業年齢構成や被害者の階層分析、さらに、内務大臣メルボーンの暴動鎮圧対策の分析などで優れている。

本稿は、まず、暴動の発生・拡大・消滅の経過を即事的に叙述することからはじめたい。つづいて、暴動の主体＝群衆の構成、暴動の社会経済的背景と動機、祝祭と暴動との関連、鎮圧のための軍隊、警察の行動等について分析する。これらの作業を通じて、ノッティンガム選挙法改革暴動のさいに市長や市会の果たした役割や暴徒と市民の関連に関する定説が修正されることになる。それは、暴動を祝祭の延長と把握することにより、また、治安部隊の行動を追跡することにより、これらの諸点が明らかになるということであるが、詳しくは本論に譲ることにしよう。本稿の最後では、ブリストルなどイングランドの他の地域でも生じた選挙法改革暴動に触れ、「1830～32年革命危機説」についても検討したい。

## II 暴動の発生・拡大・消滅の過程

ノッティンガム暴動は、1831年10月8日土曜日、上院がジョン・ラッセル法案を否決したことに端を発する。法案が158対199で否決されたのは8日の朝6時15分であったが、そのニュースは、遅くともその日の夜8時半にはノッティンガムに届いた。<sup>(8)</sup>1時間余のうちに、市が上院の決定に抗議する集会を召集するよう求めた請願が、多数の署名を伴って19以上も市長に提出された。だが、8日の夜は暴動は生じていない。

翌9日、日曜日の朝になると、ハイ・ストリートのホワイト・ライオン・ホテル前などに数百人が集まりはじめ、郵便馬車がロンドンなどから情報を運んでくるのを待つようになる。近くのダービーで大規模な騒擾が生じたという情報は、群衆を刺激し、興奮させた。後述するように、この情報は事実だった。しかし、誤報も届いた。郵便馬車が着くと、「ロンドンでは選挙法改革陣営が軍隊をやっつけている」と報告され、その報告は「大きな歓呼をもって迎えられた。」<sup>(9)</sup>やがて、ロンドンやバーミンガムやその他の都市が騒擾状態に陥り、ウェリントン侯が殺されたという噂が、ノッティンガム市内に流れる。<sup>(10)</sup>これはもちろん事実ではなかったが、興奮した群衆が暴動をおこすのは時間の問題であることが明らかになりつつあった。午後になると、改革法案反対論者の家が攻撃されはじめた。ヘダリーという名の薬剤師の家がまず襲われ、レンガの破片と石で窓ガラスが割ら

注(8) *Nottingham Journal*, 15 October 1831. Thomas Bailey, *The Annals of Nottinghamshire*, vol. IV, London, 1853 (以下, *The Annals* と略す), および, *The Date-Book of Nottingham*, vol. II, 1800-1884, Nottingham, 1884 (以下, *The Date-Book* と略す) では, ラッセル法案否決のニュースがノッティンガムに届いたのは午後8時半とされている(各 p. 373 と p. 399)。しかし, James Orange, *History and Antiquities of Nottingham*, London, 1840 (以下, *History and Antiquities* と略す) では, 午後7時となっている(p. 885)。

(9) *The Date-Book*, p. 399, および, *The Annals*, p. 373.

(10) *Nottingham Review*, 14 October 1831.

れ、つづいて、『ノッティンガム・ジャーナル』社の建物の窓も割られた。

この『ノッティンガム・ジャーナル』は、ジョージ・ストレットン (George Stretton) 所有のトリー系の新聞であり、一週間程前の10月1日付の紙面で、9月21日の R. ピールの反選挙法改革の演説を掲載したのち、つぎのように書いていた。「ヨリ穩健な改革論者がよく知っており、認めていることは、我々の現在の議会制度は、たとえ完全無欠なものではないにしても、少なくとも人間の才能がかつて造りだした最も完全なものであるということであり、今日までそれはよく機能してきており、独立を保護し国家の富と安寧を増大するために、これまでと同様に今後も存続すると考えるに十分な理由があるということである。」<sup>(11)</sup> また、議会での改革法案をめぐる審議を詳細に報告したなかで、「改革 reform という名のもとに、本質的かつ実効上はこの国の統治権力に対する革命の計画 a scheme of revolution <sup>(12)</sup>である選挙法改革法案が、下院を通過した」<sup>(13)</sup>とも書いていた。もちろん、上院で法案が否決された8日に発行された同紙は、その否決についてはまだ報じていないが、法案否決のための商人や銀行家の集会がロンドンで開催されたとか、パーミンガムで同じ趣旨の10万人規模の集会が開かれたとかいう記事を載せていた。なかでも注目すべきは、ニューカッスル侯が10月4日にラッセル法案否決の要請を上院に提出したという記事である。<sup>(14)</sup> このニューカッスル侯こそ、ノッティンガムシャーに政治的・経済的に君臨する名だたるトリーであり、多数の市民の憎悪の対象となった人物である。この要請には400名のノッティンガム市民の署名があったと報ぜられているが、<sup>(15)</sup> 9日夕方窓を割られたのは、この要請に署名した人々であった。<sup>(16)</sup>

9日夕方、闇が迫ると市内は統制不能となった。石やレンガが様々な場所で投げられ、市長自身も首を強打され負傷したといわれる。こうして、ついに、「暴動鎮圧令」が発動されるが、警察は暴徒を逮捕することができない状態がつづいた。「ガラスが割られる毎に、大きな歓声があった。その歓声を頻繁に繰り返したのは、何もしない見物人たちだったが、かれらは瞬時の興奮によって、感情が爆発した。この窓の破壊の他に、夜間に、反改革論者とみなされた人々の財産に直接攻撃が加えられた。」<sup>(17)</sup> ロングロウの店が襲撃され、本や文房具などが道路に放り出され、他の数軒も同様に襲撃された。こうして、E. カネッティのいう「閉じた群衆から開いた群衆への突然の移行、即ち

注 (11) 『ノッティンガム・ジャーナル』と対抗的位置にあった地方新聞は、『ノッティンガム・レビュー』である。急進主義者リチャード・サットンが、1829年の父の死により『レビュー』を引き継いでいた。サットンは、ノッティンガムに「政治同盟」Nottingham Political Union を組織し、選挙法改正運動を指導していた (Thomis, *Politics and Society in Nottingham*, p. 224, および, John Wigley, *op. cit.*, p. 96)。

(12) *Nottingham Journal*, 1 October 1831.

(13) *Ibid.*

(14) ニューカッスル侯によるラッセル法案否決要請の提出については, *Parliamentary Debates*, vol. 7, 3rd series, 1129.

(15) *Nottingham Journal*, 8 October 1831.

(16) *History and Antiquities*, p. 885.

(17) *The Annals*, p. 374.

1831年のノッティンガム暴動（上）

(18) 爆発」がはじまった。『ノッティンガムシャー年譜』は、この時点の状況に関して、「市長、治安判事、警察（コンスタブル）、第15軽騎兵隊は、最大可能な行動をしたが、徒勞に終った<sup>(19)</sup>」と記しているが、この記述は批判的に読まなければならない。何故ならば、『年譜』の記述は、この日の暴動の激烈さを過度に強調することによって、ウィッグの市長および市会が暴動を鎮圧せず、暴徒のトーリー攻撃を自由にさせたとの批判をかわそうとする傾向がみられるからである。であるならば、9日の夜の状況は、鎮圧部隊として出動した第15軽騎兵隊の指揮官サックウェルの内務大臣メルボーン宛書簡に語らせる方が、ヨリ正確に把握できるだろう。10日付のその書簡は、「昨日夕方6時、多数の人々がマーケット広場に集り、幾人かの住民の窓を壊し、市長も石で負傷した。私の指揮下にある軍隊がその結果投入され、11時頃までに大部分の人々は解散した<sup>(20)</sup>」とあり、小さな騒ぎは午前2時頃までであったと報告されている。さらに、軍隊の出動が、ただちに暴徒の鎮圧を意味したのではないことに、とりわけ注意を払う必要がある。9日夕方、マーケット広場に軽騎兵隊が着いたとき、群衆は国歌の合唱をもって迎えたのである<sup>(21)</sup>。群衆は国王の意志に忠実に行動している。したがって国王の軍隊がかれらの示威行動を弾圧することなどありえないと信じていた、とするR. A. プレストンの所説に、筆者も同意したい。じっさい、群衆と軍隊は「友好的」であり、火曜日の朝までは両者の対立は生ぜず、軍隊も群衆から投石を受けていない。このような当時の群衆のメンタリティーに加えて、両者が友好的であったのは、治安部隊内部の事情やノッティンガム地方の政治的・経済的構造のなかにおける市長と市会の位置が深く関連しており、この点については後に詳述するが、ともあれ、軍隊の出動は鎮圧とイコールではなかったのである。

翌10日、月曜日、暴動が予想外に拡大し、ノッティンガム全市は騒擾状態に陥った。朝のうちは静穏だったので、市長は前述の市民の要請をうけて改革法案否決に対する抗議集会を予定通り開催することにためらいはなかった。人々は続々と市の中央のマーケット広場に集合しはじめ、集会開始の11時前に、すでに広場は文字通り人で埋る。広場には祭——これに関しては、暴動との関係で極めて重要なので後に詳述するが——のための出店や見世物がある日も店をだしていたが、広場にこれ以上いるのは安全ではないと知り、店をたたみはじめた。こうして12時前には、広場には祭のあとかたもみえなくなった。集まった群衆は約1万5千~2万と推定される。広場の中央付近の馬車のなかで待機していた弁士が、次々に演説した。トマス・ウェイクフィールド、ランクリフ卿、

注 (18) Elias Canetti, *Masse und Macht*, 1960, 岩田行一訳『群衆と権力』, 法政大学出版局, 1971年, (上) 14ページ。

(19) *The Annals*, p. 374.

(20) From Col. Thackwell to Lord Melbourne, 10 October 1831, MSS, Public Record Office (PRO.), Home Office Papers (HO) 52/15, 290-1.

(21) *Nottingham Review*, 14 October 1831, および, *Nottingham Mercury*, 15 October 1831.

(22) R. A. Preston, *op. cit.*, p. 85.

(23) *History and Antiquities*, pp. 885-6.

(24) *Nottingham Journal*, 15 October 1832 では、1万5千名、また、*History and Antiquities* では、2万名とされている。

オールドノウ市参事会員、ワイルドマン大佐、T. ベイリー氏といった弁士は、いずれもノッティンガム地方の名士である。穏健な決議が採択されたときにも、静かであった。弁士はいずれも参加者に平和的な忍耐強い行動をよびかけ、集会は平穩に終わった。<sup>(25)</sup>午後2時であった。このあと、大規模な暴動がはじまる。『年譜』の表現によれば、「尊敬すべき市民は、集会后家路についた。しかし、暴徒 mob はフォレスト地区の反改革主義者の工場に押しかけ……」<sup>(26)</sup>ということになる。

群衆は反改革主義者の家の窓を再び破壊しはじめたが、混乱のため改革支持者の家の財産も誤って破損することもあった。間もなく、フォレストにあるシャープという人の所有の製粉工場が襲われ、水車や機械が破壊され、小麦粉は見つかり次第放り投げられた。それは、軽騎兵隊の到着が遅かったならば、工場全体が破壊されていたであろうといわれる程の徹底的破壊であった。<sup>(27)</sup>

夕方、暴徒は鉄棒で武装するようになっていた。鉄棒はスニートン墓地の鉄柵や家の前の柵をひき抜いたものである。暴徒は、ジョン・マスターズの住むコリック・ホールに侵入した。マスターズは、狩猟法を厳格に実行したトーリーのスクワイアとして知られていた。襲撃は、パーカーにより生々しく描写されている。

「マスターズ氏は不在だったが、暴徒は最も容赦ない復讐を誓って、家の隅々まで探し廻った。マスターズ夫人は病床についていたが、攻撃されたときは娘と偶々訪問していた外国人の婦人と応接室にいた。かの女たちは幸運にも隣の灌木の植込に逃げ込み、雨がドシャブリだったが、暴徒たちが立ち去るまで、厚く広がっている月桂樹の葉の下に身を隠していた。ホールの美しい高価な家具や何枚かのすばらしい絵画が、要するに暴徒が手に触れることができたものは全て破壊された。エール、食物、酒が飲み食いされ、何人かは泥酔した。金銀製の食器類、宝石、衣服が運び去られ、暴徒の多数はみつめた衣服を着用し、その上に自分の服を着た。部屋の一つに火がつけられ、間もなくこの建物は廢墟の山と化すであつたらう。だが、暴徒の数人は羽毛のベッドが破壊力を促進するだろうと考えて、それを火中に投じ、そのままにしておいた。結果として、火はくすぶってしまった。」<sup>(28)</sup>

このような破壊は、暴動につきものである。「人間が(このような)接触恐怖から自由になれるのは、群衆のなかにいる瞬間だけである」と述べる E. カネッティは、群衆の破壊欲について、つぎのように指摘する。「群衆は家や品物を破壊することを格別好むものである。窓ガラス、鏡、壺、彫像、陶器のような毀れやすい品物がそうである。そして、群衆の破壊欲を刺戟するのはまさにこ

注 (25) R. A. プレストンは、「すべての弁士が平和的であることの必要性を強調していることは、反対のことが危惧されたことを確実に示唆している」(R. A. Preston, *op. cit.*, p. 87) と評価している。

(26) *The Annals*, p. 374.

(27) *The Date-Book*, p. 400.

(28) *Ibid.*, p. 401. マスターズ夫人については、こう書かれている。「あの恐い夜の影響から、かの女が安全に回復することはなかった。寒気と恐怖がかの女を死に急がせ、1832年2月、ウィグワトン・ホールで死去した。極悪非道な騒乱の、そしてイングランドの暴徒の記録を恥すべきものとした騒乱の、犠牲者となった。」(J. Carter, *Visit to Sherwood Forest*, 1850, p. 46)

## 1831年のノッティンガム暴動（上）

これらの品物の毀れやすさそのものだ、と考えられがちである。破壊の音がその満足を高める、というのは本当である。陶器の毀れる音、窓ガラスの割れる音は、新鮮な生命の力強い響き、新しく生まれたものの産声である。それらの音を呼び起こすことはじつに容易であり、そのことがこの種の品物の人気を高めているのである。<sup>(29)</sup>ノッティンガムでも、暴動は窓ガラスの破壊からはじまっている。そして、窓やドアを壊すことによって家は個人性を失い、家のなかにいた群衆の仮想敵と群衆の間の「境界の踏み越え」が可能となる。その瞬間に、群衆は自由を感じる。しかし、「むきだしの状態にある群衆にとっては、一切のものがバスターニーに見える。」<sup>(30)</sup>群衆は、自らを閉じこめていた日常生活の容器の象徴を現実の監獄にみだし、じっさいに監獄を襲撃する。政治犯の解放ということと同時に、囚人を解放することによって、自らを象徴的に「日常的監獄」から解放しようとする。このような暴徒のメンタリティの変転過程を経ると、窓ガラスの破壊にはじまった暴動が監獄襲撃にまで急速に展開していくことは、しばしば生じることである。

ノッティンガムでは、月曜日、コリック・ホールの破壊後、暴徒は市内に戻り、監獄に向う。扉を壊そうとしたが、80名から成る軍隊の迅速な到着で目的は阻まれた。ラッセル中尉がその場所の守備を命じられ、他の部隊はガス工場を守るべく遣わされた。注目すべきことは、市民からなる「特別警察」が組織され、暴動鎮圧を実行したことである。月曜日の午後、治安判事は都市の住民数百人を特別警察官として宣誓後就任させ、分隊を結成し、「かれらの絶えざる活動によって多くの私有財産が略奪をまぬがれた。」<sup>(31)</sup>市長と治安判事は月曜日午後、つぎのような訓令を市書記の名前で出したが、その時刻は明確ではない。

### 訓 令

市民並びに治安判事は、公安維持の為、全ての家族長がかれらの使用人と徒弟を各自の家屋内に留めること、および、全住民が蔓延している奸計を鎮めることを要請する。

当市の全ての居酒屋店主は、ただちに店を閉じなければならない。

市書記 H・エンフィールド

ノッティンガム 1831年10月10日 月曜日午後<sup>(32)</sup>

注 (29) E. カネッティ『前掲書』、訳(上)、10ページ。

(30) 『同上』、12ページ。

(31) *The Annals*, p. 376. 当時、事件を目撃したと称する日曜学校に通っていた少年は、当時を回想して、つぎのように書いている。「(月曜日の)昼食時に学校から戻ると、年金生活者である私の父は、市長によって特別警察官として就任するべく召喚されたことを知った。すべての壮健な年金生活者は、この目的のために召喚された。ノッティンガムには当時はポリスはおらず、若干のコンスタブルがいたが、かれらの幾人かは老齢で、市を恐怖に陥れている粗野で無法な暴徒たちに対抗するには殆んど役に立たなかった。」(‘Recollections of the Past by a Nottingham Old Boy’, in *Nottingham Weekly Guardian*, 22 June 1901) この回想録は *Nottingham Weekly Guardian*, 6月22日号と29日号の2回にわたって掲載されたものである (Scrap Book V, pp. 122-5, Nottingham Local History Library)。

(32) PRO., HO 52/15, 304.

この訓令は外出禁止令であり、また、居酒屋の閉店は、急進的労働者の集合所を閉鎖することを意味していた。イングランドのどこでもそうであったように、ノッティンガムでもパブとかエール・ハウスとか呼ばれた居酒屋は、当時の労働者のレジャーの中心であっただけでなく、労働組合の起源は居酒屋であったといわれるように、急進的運動の根拠地をなしていた。「サー・アイザック・ニュートン」という名の居酒屋は、ノッティンガムのかような根拠地の一つであり、政治同盟 Political Union<sup>(33)</sup>の本部となり、バーミンガムの政治同盟と通信で連絡をとっていた。他にもラットフォードのホワイト・ライオンとか、ストーニー通りのブラック・ホースなどがニューカッスル侯に敵対するクラブとして知られており、両クラブともガラスとラベルが貼られた箱に武器を貯えているとの噂もあつた<sup>(34)</sup>。市長と治安判事は、従って居酒屋の閉店を命じたのだが、この訓令は、市長が暴動の鎮圧に真剣であつたことを必ずしも示すものではない。監獄襲撃とほぼ同時に生じたノッティンガム城の焼き討ちが、そのことを如実に示すことになる。

ノッティンガム城はニューカッスル侯所有になるもので、当時無人であり、市民の散歩など憩の場所であつたが、市の中央に高くそびえ、選挙法改革論者にとっては象徴的な攻撃対象となつた。第四代目のニューカッスル侯は極端なトーリー主義者<sup>(35)</sup>で、前述したように、選挙法改革に反対してゐた。ウェリントンと選挙法改革反対論者の多数でさえ自粛することを決めたのちに開かれた32年6月4日の選挙法改革法案の第三読会において、なお、反対の意志を表明した頑迷な22票のうちの1票が、このニューカッスル侯であつた。<sup>(36)</sup>のちに、ウェリントンをして、「かれのような馬鹿者はい<sup>(37)</sup>なかつた」といわしめた程頑迷であつた侯自身は、「私は改革論者ではないことを公言する。私は改革論者であると告白する全ての人々に疑念をもっていると宣言する」といってはばからなかつた。それ故、かれは地方でも全国でも、改革論者の憎悪的となつていたのである。

暴徒はセント・ジェームス教会と乗馬学校の間のガス灯を全て消すと城の攻撃をはじめ、まず3人が内に入り門を開けた。その間、他の一団は城内の庭に壁を破って侵入した。門が開かれると点火されたろうそくが乗馬学校の校庭から持ちこまれ、「約20人の暴徒が、疑いもなく祭できいたことのある芸人の真似をして、『前進しよう。自信をもって最後の夜を』と最大限の沈着さをもつて叫びながら集<sup>(38)</sup>合した。」「祭できいたことのある芸人の真似をして」という点は極めて重要だが、この点は

注 (33) ノッティンガム政治同盟については、前出注 (11) を参照のこと。また、バーミンガム政治同盟については、Asa Briggs, "Thomas Attwood and the Economic Background of the Birmingham Political Union", in *Cambridge Historical Journal*, vol. IX, no. 2, 1948, pp. 190-216. を参照のこと。

(34) John Wigley, *op. cit.*, p. 100.

(35) ニューカッスル侯は、カソリック解放にも反対し、市民的自由に対する弾圧立法である六法(1819年)を擁護し、のちには穀物法撤廃に反対した。1837年にノッティンガムシャー知事の地位を失つた。

(36) J. M. Golby, *op. cit.*, p. 7.

(37) *Greville Memoirs*, vol. I, p. 194-5, 1885 ed., quoted in J. M. Golby, *ibid.*, p. 8.

(38) *Duke of Newcastle's pamphlet, Thoughts in times past tested by subsequent events*, 1837, p. 4, quoted in J. M. Golby, *ibid.*, p. 7.

(39) *The Annals*, p. 376.

後述する。) やがて6名が城内に侵入、破壊が開始された。壁からタバストリを引き剥がし、階段の手摺を壊した。さらに、40名の暴徒が加わって、窓、机、シャンデリアが壊された。やがて「12名程の指導者がこの高貴な館を焼失させる最良の方法を相談した。様々な部屋の床に穴があけられ、壊された階段の手摺に火がつけられて、隙間におかれた。机にも火がつけられ、材質が乾燥していたため、焔はすぐにいろいろな個所であがった。夕方7時少し過ぎ、暴徒の荒々しい叫びがかれらの極悪非道な暴行の完遂を市に宣言した(火が上がったとき、約150人の人が城内にいた)。……城内の建築的装飾品は汚され、先祖の美しい騎馬像は破壊され、窓の上の胸像は残酷に破壊された。」<sup>(40)</sup>これらは、いずれも破壊欲を最も充足することになった。そのときの暴徒の心理状態を再びカネッティに語らせよう。「具象的な彫像の破壊は、もはや認められなくなったヒエラルヒーの破壊にはかならない。それは、一般的に確立され誰の目にも明らかで、どこでも通用するさまざまな隔たりに対する冒瀆なのである。あらゆる彫像の堅牢さは、それらの永続性の表現であった。それらの像は、大昔からいつも泰然自若として存在してきたように見える。以前には害意を抱いて、それらに近づくことは全く不可能であった。いまや、それらは引きずりおろされ、粉々に打ち碎かれる。この行為において解放は成就される。」<sup>(41)</sup>この破壊の「一般法則」は、ノッティンガム暴動にも貫いている。奇妙な記録として、タバストリの一部はその場で1ヤード3シリングで見物人に売られたとあるが、<sup>(42)</sup>これをもって、暴動は単に略奪を目的としたものとする見解も生じることになる。

ともあれ、火勢は拡がり、9時から10時の間に最も勢いよくなり、群衆の歓呼が高まっていった。暴動が生じた頃、城門近くに住んでいたある婦人は、回想録のなかでこのとき目撃した情景をつぎのように書いている。「古風な番人詰所の門が壊された。そびえ立つテラスはすぐに人で一杯になった。城門の家屋の屋根に上った見物人は情景をよく見渡すことができた。巨大な建物をつつむ暗闇はすぐに赤味をおびた光の閃きで明るくなった。光は窓から窓へときらめき、今や火炎の舌が漏れると歓声と叫びがあがり、それは炎が闇に拡がるにつれて空中に浸透していった。」<sup>(43)</sup>

かくして、市中央にそびえ立っていた権力の象徴、即ち、極端なトーリーで反改革法案論者として市民の憎悪的だったニューカッスル侯所有の城が焼き討ちされたのである。

「あらゆる破壊手段のうちで、もっとも印象的なものは火である。火は遠方からも見えるし、常に大ぜいの人びとを引きつける。火は取返しをつかぬほどに破壊する。火の後には、以前に存在したものは何ひとつ残らない。何かに火を放った群衆は、自らを無敵の者と感じる。火がまわりに燃え拡がるあいだは、あらゆる人びとが群衆に合流するであろうし、敵対するものはすべて破壊され

注 (40) *Ibid.*, pp. 376-7.

(41) E. カネッティ『前掲書』、訳(上)、11ページ。

(42) *The Annals*, p. 377.

(43) Mrs. Gilbert, formerly Ann Taylor, ed. by her son, Josiah Gilbert, *Autobiography and Other Memorials*, in *Nottingham Weekly Guardian*, 3 November 1923.

るであろう。火は、……群衆のために存在するもっとも力強いシンボルである。あらゆるものを破壊しつくしたあとで、群衆と火とは消滅する。<sup>(44)</sup>深夜、豪雨が降りはじめ、暴徒は退散し、その夜はこれ以上暴動が拡大するのが阻止された。翌朝みると、壁以外は殆んど完全に消失しており、2人の子供が好奇心から見物にきて焼死しているのが発見されたが、他に犠牲者はなかった。暴徒の襲撃は、治安当局の弾圧をうけない、いわば完全に自由な破壊だったといってよい。

翌火曜日、群衆は再びマーケット広場と公園に集まった。かれらは、前夜の火事で近隣の村からきた他所者だったといわれている。かれらはビーストン Beaston に向い、ウィリアム・ロウ所有の絹工場を襲い、放火、全焼させる。<sup>(45)</sup>かれらのうちのあるものは、他所者であるために工場主のウィリアム・ロウとアルフレッド・ロウを区別できず、誤って襲撃してしまうが、他の多くの者の攻撃目標は明確だった。<sup>(46)</sup>この工場は1820年代中頃に建てられた東ミッドランド地方最大の絹工場であって、工場主は、トリーだった。<sup>(47)</sup>ジョージ・ベックという名の20歳の青年が暴徒の先頭にたち、三色リボンのついた旗(または、ポール)をもって暴徒に指示を与えた。<sup>(48)</sup>「前列、止まれ。ここがその場所だ。整列し、諸君の任務を遂行せよ。」かれらは、軍隊のように規律がとれていたという記録もある。<sup>(49)</sup>工場は午後3時までには廃墟となり、大量の絹製品も灰燼に帰した。損害額は、建物機械が6,650ポンド、絹製品が1,140ポンドであった。『ノッティンガム・ジャーナル』は、「この惨禍を、不幸にして職を失った多数の働く人々は痛切に感じるだろう」と報じた。<sup>(50)</sup>

さらに、暴徒は工場を離れると、4軒の家に入り略奪した。マサイアス・ニーダムの家(レントン・ハウス)では、食料品、エール、ワインを飲食し、40ポンドもする食器類をはじめ、運べるものは全て運び去った。このニーダムという人は、ウィッグの選挙法改革論者であり、ノッティンガムの指導的ユニテリアンであったから、<sup>(51)</sup>暴徒は誤って襲撃したのと考えられる。マサイアス・ニー

注(44) E. カネッティ『前掲書』、訳(上)、12ページ。

少年時代にこの暴動を見聞したとする前記回想録は、ノッティンガム城の炎上について、「私は何と多くの群衆が燃えさかる炎を外に出て見ていたか、また、階が次々に落ちる毎に何という感嘆の声があったかを想い出すことができる。数千人の人々が、メドウや通りからその光景を眺めており、かれらには燃えている建物は火のついた山のようにみえた」と書いている('Recollections of the Past by a Nottingham Old Boy', in *Nottingham Weekly Guardian*, 22 June 1901)。

(45) 同上の回想録は、広場からビーストン絹工場に向う暴徒をつぎのように書いている。「先頭には数人の成人がいた。かれらの数人はシャツのスリーブを着ていたが、大部分は成人に近い若者であった。暴徒の末尾は主として大柄の頑丈な男であった。かれらの大部分は大きな太い棒をもっており、幾人かは鉄棒をもっていた。歩道には人々が多数いた。かれらのなかの何人かは暴徒に向って叫んでおり、暴徒は棒を振り回し、叫び返していた。」(*Ibid.*)

(46) M. I. Thomis, *Old Nottingham*, 1968, pp. 34-7.

(47) 「群衆は『資本主義的支配の象徴として数工場を焼いた』(G. M. Trevelyan, *Lord Grey of the Reform Bill*, 1920, p. 315)という指摘は、事実からしてひどく不正確であり、解釈上のほとんど純粋な空想にすぎない。」(Thomis, *Politics and Society in Nottingham*, p. 226, fn. 13)

(48) *Derby Mercury*, 11 January 1832, quoted in John Wigley, *op. cit.*, p. 98.

(49) *Nottingham Journal*, 14 January 1832. 「前列止まれ……」との指示は、32年1月の暴徒の裁判のさいのウィリアム・タートンによる証言である。この裁判については、本稿Ⅲで詳述する。

(50) *Nottingham Journal*, 15 October 1831.

(51) R. A. Preston, *op. cit.*, p. 86.

ダムの娘であるエレン、ニーダムは、10月11日付の友人宛手紙のなかで、その日の午前11時半頃、いつものようにビーストンにでかけると絹工場の襲撃を目撃し、急いで家に戻り、10分後に自宅に着くと、すでにそこは暴徒に囲まれており、台所にも侵入していたと、興奮さめやらぬ調子で書いている。そして、「かれらは母をライト夫人と呼んでいた。明らかにかれらはこの家をライト家と<sup>(52)</sup>思いこんでいる。『銀行家のライトを片付けよう』<sup>(52)</sup>と<sup>(52)</sup>いってかれらがやってきたのを私達はきいている」と続けていることから判断すると、暴徒はニーダムを銀行家ライトと誤った公算が大きい。他の襲撃された3軒は、ジョン・ライト、チャールトン、ジョン・ストーラーの家であり、いずれも反改革論者であった。

暴徒はさらにミドルトン卿の邸宅ウォラトン・ホールをめざした。そのホールはウォラトン公園にあり、第七代の男爵である家主は元来トーリーであったが、改革論者に転向していた。だが、この事実にもまた広く知られておらず、そのため、暴徒の襲撃の対象となったものである。このミドルトン卿は、自らの地位を自己の財産を襲撃から防衛するためにのみ利用したとして、のちに非難された人物である。<sup>(53)</sup>ホールはハンコックス大佐の率いる部隊にキャノン砲を備えて防備させたし、公園の入口付近は地元のウォラトン・ヨーマンリーと特別警察隊で固めさせた。<sup>(54)</sup>暴徒は劣勢にもかかわらず公園の門の突入をはかるが、一部が突入したところで「門が閉じられ、公園の中に入ったものはワナにかかって捕えられた。」<sup>(55)</sup>逮捕者の数は16~17名（『ノッティンガム・ジャーナル』では15名）。<sup>(56)</sup>かれらをカウンティーの監獄に収容すべく、第15軽騎兵隊の駐屯地に護送した。ところが、かれらの護送中、救出しようとした男がピストルで撃たれるという事件が発生する。男の名は、トーマス・オークランド。歩兵第33連隊に永年勤め、ウォータールーのときに重傷を負ったという経歴の持主である。事件の経緯はこうである。ロウレストン大佐の率いる軽騎兵隊が逮捕者を護送すると、

注 (52) Letter from Ellen Needham to Lucy Martineau, 11 October 1831, in *Nottinghamshire Countryside*, 1955, vol. 17, no. 1. この手紙は、襲撃された日の夜に書かれた私信であり、レントン・ハウスの暴徒による破壊の状況も詳細に書かれている。以下に掲げる手紙の冒頭部分は、ウィッグの産業家であるニーダムが暴徒の襲撃を受けるとは予想すべし、前夜のノッティンガム城炎上にさいしても何ら危機感をもっていなかったことを示している。

「まず第一に私達は無事です。……城は昨夜8時から2時まで燃えていました。そして、今日、ビーストンの絹工場が燃え落ちました。ニュースがノッティンガムに届いた土曜日夜以降生じたこのすべてをあなたに今告げることはできません。昨夜はひどい雨でした。東方がたいへん明るいのは見えたのですが、外にでて濡れることはないと思って、皆よく眠りました。それが燃えている城の明りとは夢にも思いませんでした。私たちの周囲の人々は皆起きて、夜通し見ていました。ウォーズ夫人は庭のビンが拾い上げられるほど見えたし、私たちの館は昼間のように明るかったといえます。」(Ibid.)

(53) 「最も近い軍隊—ウォラトン—に機動性があったとしても、その効果は、ミドルトン卿が自分自身の財産を守るためその軍隊の任務遂行を独占したので減少してしまいました。暴徒が(ウォラトン)公園の外にある数軒の家屋を襲撃し、公園の入口から1マイルと離れていないビーストンの絹工場を焼き払っている間、全軍隊はウォラトン公園に駐屯していたのである。」(R. A. Preston, *op. cit.*, p. 91)

(54) *The Annals*, p. 378.

(55) 'Recollections of the Past by a Nottingham Old Boy', in *Nottingham Weekly Guardian*, 22 June 1901.

(56) *The Annals*, p. 378, および, *Nottingham Journal*, 15 October 1831.

逮捕者の奪還が試みられた。軽騎兵隊は、まず、レントンのノッティンガム側で暴徒と遭遇する。暴動鎮圧令が発動される。暴徒はヨーマンリーに向かってレンガと石を投げはじめ、血を流すものが幾人かである。ヨーマンリーはピストルを発射するが、暴徒は投石すると壁の陰に身をかくすので、ピストルの実際的な効果は少ない。やがて、軽騎兵隊がマーケット広場を横切ったとき、再び悪口が浴びせられ、投石がなされる。隊の後部の1人は投石され、暴徒に押えつけられたので発砲し、弾はオークランドの胸から肩を貫通し、さらにジョサイア・ホプキンスンという人の額をかすめた。オークランドは病院に収容され、15日付の新聞は14日には「回復することが期待されないような非常に危険な状態<sup>(57)</sup>」と報じたが、その後死には至らず、病院で長期治療後退院している<sup>(58)</sup>。この発砲事件の原因には、(1)オークランドは泥酔した粗野な見物人に過ぎなかった、(2)かれがじっさいに軽騎兵隊員に暴行を加えた、(3)逮捕者を救出しようと試みた、との諸説があった。逮捕者16人はカウンティの監獄に収容されるが、『年譜』によれば、「この発砲の結果は、暴徒の行動に極めて微妙な効果をもたらした<sup>(59)</sup>。」市書記エンフィールドからメルボーン宛の書簡には、発砲の効果とそれ以後の市の治安状況について、つぎのごとく書かれている。「……ついに兵隊が一発撃ち、ちょうど石を投げた男に命中した。かれは倒れ、外科医に運ばれ、そこから診療所に運ばれ、現在そこにいる。これは暴力を阻止するのに強力な効果をもたらしたと信じられている。最強の措置、即ち、通常の警察と特別警察、および、サックウェル大佐の指揮下にある第15軽騎兵隊とヨーマンリー・カヴァリ<sup>(60)</sup>リからなる(不明)力の適当な配置がなされ、夜間も継続された。それ以上の暴動は生じなかった。」

その日の午後、市長は住民に対し、つぎのような布告をだし、前日の訓令と同じく、外出禁止と居酒屋の閉店を命じ、その実施を夕方5時とした。

#### 布告

ノッティンガム市

当市および近隣における危険な暴動行為は市長と治安判事が以下のことを断固として要請することを不可避としている。ノッティンガムの全住民は扉を閉め、かれとかれらの家族とを夕方5時以降、各自の家屋に留めなければならない。

当市内の居酒屋店主および公認の酒類販売業者は、夕方5時には客がいないようにして夜間閉店することをここに命ずる。

本布告を遵守することは厳格に強制されるという公的警告をここになす。

市長 J. H. パーパー

注 (57) *Nottingham Journal*, 15 October 1831.

(58) *The Annals*, p. 379, fn.

(59) *Ibid.*

(60) From H. Enfield to Lord Melbourne, 12 October 1831, MSS, PRO., HO 52/15, 300. なお、(不明)は、欠損のため2字判読不能の箇所である。

ノッティンガム, 1831年10月11日<sup>(61)</sup>

この布告のもとに商店は閉じられた。マーケット広場に群衆が再度集合しようとしたが、軍隊がバリケードを築きかれらを解散させ、午後7時には広場は平穏になった。バリケードのため広場に入れない群衆は、止むなくメドウに集まった。軽騎兵隊や特別警察が市参事官オールドノウと共にメドウにかけつけたのは午後8時。暴徒の数は300人を越えてはいなかった。数人はピストルをもち、<sup>(62)</sup>他は鉄棒などで武装していたが、両者の衝突はなかった。暴徒が劣勢なのは明らかだった。1人の紳士然とした男(何者かは不明)が暴徒に演説し、解散を勧めた。「互いに殆んど面識がないし、ほとんど武器もっていない。影響力ある指導者もいない。目的を効果的に達成できずに、生命をかけるとは全く狂気の沙汰ではないか」と。何人かが叫んだ。「解散してどうなるというんだ。家に帰って餓死するのもここで死ぬのも同じことだ。」<sup>(63)</sup>しかし、暴動が終りに近づいているのは明白だった。人々はやがて暗闇のなかに散っていった。「幾人かは干草の下に横になり、何人かは渡船場に向った。だが、朝になると、数十人の人々が物憂げに各の村に向って各別の道を疲れた身体を引きずっていくのが見えた。」<sup>(64)</sup>暴動は終わった。かれらは群衆であることを止めて、再び日常の生活の規範とリズムに戻っていく。水曜日には、ノッティンガム市内は全て暴動以前の平常の状態に戻った。<sup>(65)</sup>

「開いた群衆は増大をつづけるかぎり存続する。それは増大をやめる瞬間から崩壊しはじめる。なぜなら、群衆は発生の時と全く同じ突然さで崩壊するからである。」<sup>(66)</sup>

### III 裁判と処刑

つぎに、暴動の終了から逮捕者の裁判と処刑に至る過程を辿ろう。イギリス政府はノッティンガム暴動に強い関心を払った。第15軽騎兵隊長サックウェルは、前述したごとく、暴動発生から消滅まで連日ロンドンのメルボーン宛に状況を報告している。<sup>(67)</sup>メルボーンは、10月18日付で、ノッティンガム城襲撃に加わった者の密告者に500ポンドの賞金を与えるとの布告を、『ロンドン・ガゼット』やノッティンガムの地方新聞に載せた。だが、密告した者が現われたという史料はない。<sup>(68)</sup>

注 (61) *Proclamation, Town of Nottingham*, by J. H. Barber, Mayor, 11 October 1831, PRO., HO, 2/15, 305.

(62) *The Annals*, p. 380.

(63) *Ibid.*

(64) *Ibid.*

(65) 市書記エンフィールドは、ようやく10月13日付メルボーン宛書簡で、「市長と治安利事は、市とノッティンガム近隣では、昨夜は静穏がつづき、暴動の出現は完全に終わったことを、閣下に報告するよう私に望んでいる」と書くことができた。ただし、前夜、ノッティンガム市から5マイル程離れたノーマントンで焼き討ちが生じたことも付加しなければならなかった (From H. Enfield to Lord Melbourne, 13 October 1831, MSS, PRO., HO 52/15, 306).

(66) E. カネッティ『前掲書』, 訳(上), 6ページ。

(67) From Col. Thackwell to Lord Melbourne, 10, 11, 12 October 1831, MSS, PRO., HO 52/15.

(68) 「ただし、放火犯が自ら名乗りでも賞金は与えない」という注釈をつけたこの布告は、『ノッティンガム・ジャーナル』には、10月29日, 11月5日, 11月12日に掲載されている。

ポーンは、11月19日にノッティンガム市長および治安判事に、ひきつづき暴動が生じないよう警戒するよう指示を与えている<sup>(69)</sup>。暴動直後は、ニューカッスル侯はロンドンからノッティンガムシャーに、日中帰ることができず、襲撃をおそれて秘密裡に戻るという状態だったが<sup>(70)</sup>、その後も治安状況は不安定であった。31年12月に、イングランド北部地区司令官 H. ブーヴェリーは、ノッティンガム市長に100丁のマスケット銃と2千発の弾丸を送っているし、また、軍需省はサミュエル・スミス会社に手榴弾を渡している<sup>(71)</sup>。さらに、ラトランド侯はレディー・シェリー宛の1832年1月の書簡のなかで、ノッティンガム暴動の再発をおそれ、全ての使用人に鉄砲の訓練を施したと告げたあと、「私は大量の武器と弾の供給をウリッチから得、もし攻撃されても、完全に防御できるようにしている<sup>(72)</sup>」と書いている。一部の土地貴族は、暴徒からの防衛のため、自ら武装訓練をせねばならなくなったのである。

ニューカッスル侯は、メルボーン宛に治安状況についてしばしば報告していたが、メルボーンの方は、その報告の信頼性に疑問をもっていた<sup>(73)</sup>。また、メルボーン宛には、他にも暴動の恐怖にもとづく誤報も届いた。R. W. マーストンの11月13日付メルボーン宛の書簡は、その例である。これは、100人以上の者が前記の「サー・アイザック・ニュートン」というパブに、「かれらの決める法を黙認しないすべての人々の財産を破壊すると脅迫しながら、製造業主によってつくられたすべての規則と規定に反対することを目的として」毎夜集会しており、迅速な手段が採られないと、「最も重大な暴動と奸計が生じる<sup>(74)</sup>」という情報だった。メルボーンは、11月19日にノッティンガム市長と L. ロウレストンにこの内容を伝えたが、そのパブの搜索の結果は、この情報が事実無根であるということだった<sup>(75)</sup>。この書簡には、「もしこのことを私が書いたことが知れたら、私の生命は安全ではない<sup>(76)</sup>」との理由から署名をしない、と書かれている。これは、暴動の与えた影響の大きさを間接的に示しているという点で注目に値しよう。ところで、メルボーンが信頼することができた情報は、当

注 (69) From Lord Melbourne to the Mayor, 19 November 1831, PRO., HO 41/10, quoted in John Wigley, *op. cit.*, p. 99.

(70) Letter from Mr. E. Tallents to Duke of Newcastle, 13 October 1831, および, Letter from J. S. Gell to Duke of Newcastle, 18 November 1831, quoted in J. M. Golby, *op. cit.*, pp. 16-7.

(71) From Lord Melbourne to Major General Sir H. Bouverie, 12 December 1831, PRO., HO 41/10, および, Home Office to Samuel Smith and Co., 29 November 1831, quoted in John Wigley, *op. cit.*, p. 99.

(72) *Nottingham Weekly Guardian*, 30 July 1949. なお、ウリッチは、ロンドンのテムズ河岸にあった軍需工場のこと。

(73) Thomis, *Politics and Society in Nottingham*, p. 231.

(74) Local Notes Quarries, in *Nottingham Weekly Guardian*, 20 October 1923.

(75) *Ibid.* ウィグリーは、「メルボーンは、すぐにノッティンガムの市長と連絡をとり、市長は‘密使’をサー・アイザック・ニュートンに送り、三日後に返答した」と、書いている (John Wigley, *op. cit.*, p. 100)。

(76) *Ibid.*

時すでに有名であった労働組合指導者 G. ヘンスン Gravener Henson の「厳秘」<sup>(77)</sup>と印されたメルボーン宛の書簡であった。「ノッティンガムは予期しうるより平穩である」<sup>(78)</sup>とあるヘンスンの書簡を読んでメルボーンがようやく安心したという事実は、労働史家には意外なものと響くかもしれない。しかし、それ以前に、メルボーンは治安の安定のためには暴動時の逮捕者に厳罰を課すべきだと考え、トーリーのカウンティー治安判事であるランスロット・ロウレストン(Lancelot Rolleston)<sup>(79)</sup>に事件の証拠を蒐集し、何人を死刑にし何人を軽い処罰にするべきか通告するよう求めていた。このメルボーンのロウレストン宛書簡は10月29日付であるから、暴動からまだ3週間経ったにすぎない時期に、すでに裁判の結果は予め決定されていたようなものであった。デンマン(Denman)は、かつては改革論者として市民の支持を受けていたが、<sup>(80)</sup>今や検事総長として暴徒を処罰すべく行動し、ノッティンガム城、コリック・ホール、ビーストン絹工場、ウォラトン・ホールに対する襲撃の証拠を蒐集した。こうして、翌32年1月4日から特別裁判がノッティンガムで開かれることになったのである。

裁判にかけられたもの49名に対し、1月15日に最終判決が下った。12名は証拠なしで釈放、2名は無罪であった。しかし、G. ヒアスン(George Hearson)に対する判決は、「ビーストン絹工場に放火し、かつコリック・ホールに侵入し放火したため死刑」<sup>(81)</sup>であった。アームストロング(Armstrong)、シェルトン(Shelton)、ベックの3名も死刑であった。キッチン(Kitchen)、サーマン(Thurman)、ウィッテイカー(Whittaker)は流刑となった。<sup>(82)</sup>被告たちだけでなく、ノッティンガム市民の多くにとって、この判決は予想外に重いものであった。被告は、選挙法改革のための暴動故、国王が保護してくれると最後まで信じていたふしがあり、検事総長デンマンが被告を擁護しなかったことが、<sup>(83)</sup>むしろ驚きであった。

注(77) G. ヘンスン(1785—1852)は、ノッティンガムの掛け枠編み工で、E. P. トムスンが、ジョン・ガスト(John Gast)とジョン・ドハーティ(John Doherty)と共に、「初期に出現した三人の真に印象的な労働組合指導者」(Thompson, *The Making*, p. 851)と評価した人物。トムスンの見解に対する批判として、Roy A. Church, 'Gravener Henson and the Making of the English Working Class', in E. L. Jones & G. E. Mingay eds., *Land, Labour and Population in the Industrial Revolution*, 1967, pp. 131-61, とくに, p. 158 も参照されたい。

(78) From G. Henson to Lord Melbourne, 3 December 1831, PRO., HO 40/29, quoted in John Wigley, *op. cit.*, p. 100.

(79) From Lord Melbourne to L. Rolleston, 29 October 1831, PRO., HO 41/10, quoted in John Wigley, *op. cit.*, p. 100.

(80) T. デンマンは、1830年の選挙で当選した選挙法改革を強く主張するウィッグであった。31年3月にノッティンガム市会が選挙法改革の署名9030票を集めたとき、デンマンは尽力し、同年5月に再選された(Thomis, *Politics and Society in Nottingham*, p. 221)。

(81) Schedule of Prisoners Committed to take their Trials charged with being concerned in the Riots on the 10th and 11th October 1831, MSS, PRO., HO 52/15, 347.

(82) *Nottingham Journal*, 21 January 1832, および, *The Annals* pp. 382-3.

(83) 陪審長のジョージ・ベンティンクがウィッグの大臣 J. C. ホブハウスに語ったところによると、「被告は死刑の判決がでるとは少しも考えていなかった。反対に、かれらは検事総長がかれらを擁護しなかったことに驚きを表わした。」(Lord Broughton, *Recollections of a Long Life*, ed. by Lady Dorchester, 1910, IV, 162, quoted in R. A. Proston, *op. cit.*, p. 85)

この判決に対する市民の反応が、暴動史研究には重要である。前記『年譜』によれば、「タウンと近隣における一般的感情は判決の執行に強く反対だったので、裁判官や内務大臣に対してあらゆる可能なアピールがなされ、国王への請願には2万5千人以上が署名した。」<sup>(84)</sup>

被告の救出活動は、裁判の開始される少し前、12月末からはじまり、委員会が結成され、G. ヘンソンを中心に救出資金を集めていた。委員会は市会や有力者たちの公的な支持は受けず、「生活において囚人と同一の状態にある」人々から構成されていた。<sup>(85)</sup>しかしながら、現実には囚人を救出するまでには至らなかった。「一日一日と過ぎていき、時は足早に経過したが、望ましい救出はなされなかった。昼夜を問わず、監獄の壁の内部は強力な軍隊が防備していたけれども、暴徒たちは脱獄を考えたのである！」<sup>(86)</sup>土曜日の夜、脱獄計画は発覚し、毛布を引き裂き、2フィート間隔の結び目をつなぎ合わされた全長27ヤードのものが発見された。脱獄計画に参加したものには、重い足枷が付けられた。「日曜日はかれらには全く重くするしい日となった。足枷で擦りむけると、それがかれらの失敗した計画を痛恨の念をもって想い出させたが、加えて、刑執行の公式命令がロンドンから届き、かれらに伝達された。激しい苦痛の呻きが生じた。死刑執行令状が届いたことが知れると、すぐに、囚人が有罪とされた証拠の性質について調査がなされるまで刑の執行を国王に停止するよう求めるべく、下院への請願が急ぎなされた。」<sup>(87)</sup>この請願には、日曜日ではあったが、24時間以内に1万7千名の署名が集まった。<sup>(88)</sup>信じられないほど急速なこの署名の集まり方は、いかに多くのノッティンガム市民が、暴徒の死刑執行に強い関心を持ち、暴徒に敵対心ではなく親和感を抱いていたかを間接的に証明するものである。この請願にもとづいて、1月31日にフランシス・バーデット（Francis Burdett）が釈放の動議をだしたが、不成功に終わった。<sup>(89)</sup>しかし、火曜日の午前中に、国王の使者が到着して、シュルトンとパーキンスの2名に限って執行猶予とする旨の令状をもってきた。翌水曜日は、残り3名の者の死刑執行の日であった。前記の回想録は、その日の朝のことをつぎのように書いている。

「特別裁判が終わったとき、ノッティンガムには驚きと悲しみがあった。……処刑のときが近づくと、市の興奮は高まり、新しい暴動のおそれが出てきた。……処刑の朝、私の父は、夜中に建てられた絞首台を私にみせるために早くから連れだした。台の前面は一部さえぎられていたが、道ではまだ柱や板を固定している仕事をしていた。多数の人々が恐ろしい準備を見つめていたが、職務についている特別警察が道路を整理していた。絞首台はみたところたいへん大きく強力であったこと

注 (84) *The Annals*, p. 383.

(85) Thomis, *Politics and Society in Nottingham*, p. 233.

(86) *The Annals*, p. 383.

(87) *Ibid.*

(88) *Ibid.*

(89) この否決には、2人の当地方選出の国会議員、ファーガスン（バラ選出）とデニスン（カウンティ選出）が加わった（*Parliamentary Debates*, vol. 9, 3rd series, 1049-51）。

が強く印象に残っている。<sup>(90)</sup>」

死刑は公開で行なわれ、多数の市民がそれを見るために集まってきた。大声で半ペンスの新聞を売るものもあった。「かれの売っている新聞には死刑囚監房内の3人の囚人の絵があった。かれらは壁に鎖でつながれていた。」絵の下には3人の遺言が書かれていた。「人々はその新聞をかなり自由に買っていた。というのは、囚人たちに対して、とくに、生粋の土地っ子で20歳にまだならない最年少のベックに対して、市には大きな同情と共鳴があったからである。カーリー・ヒアソンは、市の不良仲間ではよく知られており、評判も良くなく、数ヶ月前に賞金付拳闘に出場していた。アームストロングは、ミドルストーン・レイン出身である。かれは靴下編み工で、結婚することになっていた。……処刑をみようとする道にはおびただしい群衆がいた。いい場所にはどこも大人や子供が群がっていた。数軒の家は、屋根でさえも人々に覆われていた。最後の瞬間に荒くれ男の一群が絞首台に殺到し、死刑囚を解放するだろうという情報が流れてきたが、もしそのような意図があったとしても、そうするのは絶望的にみえた。監獄の鉄のフェンスの内部には、武装した護衛兵の一团がいた。外部には、警察の一团がいた。セント・メアリー教会の方角には、騎馬兵と歩兵の双方から成る強力な軍隊が駐屯しており、私は人々が道路の中央を掃射できる2台のキャノン砲が配置されていると話しているのをきいた。救助することは不可能であった。<sup>(91)</sup>市民の処刑反対の暴動をおそれて、ノッティンガム市内には軍隊、警察、特別警察が配備されていたのである。

この刑執行の模様を、『年譜』が残酷にも淡々と記録している。「執行台に着くと、ベックは絞首台をじっと凝視し、また、ヒアソンはいつもの粗野な表情で見た。アームストロングは、きたるべき運命について深い思いに沈んでいるようであり、絞首台にわずかに注意を払っただけだった。3人は牧師とともにひざまづき、牧師はかれらのために祈った。終るとかれらは立ち上り、友人の温情に対して大なる感謝の意を表しつつ、居合わせた数人と握手を交した。また、かれらを救出するすべての試みはなされ、他に手段は残されていないということを内心かれらは確信していた。囚人たちは皆同じ服を着ていた。黒いコートとウェスト・コート、白いズボン、白い木綿の手袋と黒いネックチーフである。ロープが調節され、用意万端ととのうと、牧師が葬礼の祈りの言葉を読みはじめた。『人生の半ばにして我々は死す』という言葉が繰り返されているうちに、12時20分前、どんな勇敢な心をも動かさずにはいられない恐怖の叫びの中で、落下した。ベックはウォラトンの、ヒアソンはノッティンガムの、アームストロングはマンズフィールド近くのプリースリーの出身であった。<sup>(92)</sup>」

処刑の2、3日後、死刑になったヒアソンの葬式がウェズリー式になされたとき、葬式の列を教

注 (90) 'Recollections of the Past by a Nottingham Old Boy', in *Nottingham Weekly Guardian*, 27 June 1901.

(91) *Ibid.*

(92) *The Annals*, pp. 383-4.

千人の人々が見送った。この葬儀は兄トマス・ヒアスンという「尊敬すべきレース業者」によって  
生まれ、当日もノッティンガム市の緊張は高まったのである。<sup>(93)</sup> 処刑に対する市民の不満は長く残り、  
G. ヘンスンは、被告が治安判事により不当に告白を強いられたので議会で調査するよう運動を起  
し、3千ないし4千の署名を集めて議会に働きかけた。請願は、32年6月22日、ハントによって提  
出されたが、コベットとオコンネルは協力することを拒否していた。囚人の取調べの不当性につい  
ては、関係した治安判事のところで判定し、当然の結果として、その申し立ては「虚偽であり、か  
つ中傷である」とされた。ハントは、自らの判決の是非をその当該治安判事が形式的に判定を下す  
という点を批判したが、究明はそこで停止してしまっ<sup>(94)</sup>た。選挙法改革法案は、1832年6月5日に、  
最終的に成立していた。（続）

（経済学部教授）

注 (93) R. Sutton, *Some Particulars of the Life, Behaviour and Execution, etc.*, Nottingham, 1832, pp. 19-23, quoted in John Wigley, *op. cit.*, pp. 100-1.

(94) Thomis, *Politics and Society in Nottingham*, p. 234.